特別寄稿

女子大での英語教育

English Education at Shinonome

松　本　達　也
Tatsuya MATSUMOTO
（松山東雲女子大学元教授）

1992 年に松山東雲女子大学が産声をあげたとき、ちょうどそれは私がそれまで勤めていた高等学校を辞した時でもあった。カッコよく言えばもう一度英語を本場アメリカで学び、M.Ed（教育学修士）を取得し、帰国後には英語教師の養成に携わりたいとの思いがあったからである。新設の松山東雲女子大も英語教員の養成を目指しており、1996 年には文部省から「教職課程」の設置認可が下りたのであった。

帰国後、運よく松山東雲学園に採用され、1995 年からは女子大学に勤務することとなり、誕生したばかりの「教職課程」を任せていただけることとなった。

女子大での勤務を思い起こすと本当に様々なことがあったが、そんな中で強く心に残っている「東雲の英語」に関わってきたことを振り返ってみたい。

まず第一は、やはり発足の当初から携わった教員養成についてで、その思い入れも加わり感慨深いものがある。認可が下りた 1996 年に早速短大からの編入生 2 名が受講し、翌年、本学での最初の免許状（高校二種免許）を取得した。1998 年度には認可後初の「英語科教育法」のクラスで 15 名の受講生があり、その後 2012 年度の教職課程終止までに免許状を取得した者は 107 名を数えた。卒業生のうち何名かは現在でも学校現場で英語を教えていることは嬉しいことこの上ない。

教職課程の受講生は、「英語科教育法」で英語教育の目指すところを学び、そして最終学年では、審査に合格した者が「教育実習」を行うことで卒業時に免許状を取得することができた（二科目とも担当）。「教育実習」は、原則母校実習で、本人が母校へ出向き許可を得るものであった（中学校・高校のどちらでもよく、その結果取得できる免許状は、卒業時に中学校・高校の二種類であった）。実習中は大学側から担当者が実習校に伺い、実習受け入れのお礼と「実習中指導」を行っていた。遠くは沖縄・九州をはじめ山陰、山陽、近くでは高知、愛媛県内と実習中での訪問がかなり厳しい状況のときもあった。訪問中、うまく時間が合えば実習生の授業も観察ができ、堂々と授業を行っている姿には、担当者としてホッとした気持ちと誇らしい気持ちが沸き上がってきたものである。

次に記しておきたいのは、海外研修プログラムについてである。非常に充実した研修プログラムについての協定を幾つかの大学と結んでいた。アメリカの Pitzer College（CA）での夏季研修、同

じくアメリカの Stephens College（MO）の Semester Program 及び語学・文化研修、さらにもう一つ Cedar Crest College（PA）での短期研修、それと中国の南京大学での短期研修であった。このうち特筆すべきは“Stephens Semester Program”である。このプログラムを希望する学生は審査（選抜試験）を受けることが条件だった。合格した者は一学期間同大学の学生寮に入り、大学で授業を受け、さらに受講生各自が決めたテーマに従って研修を進めていったもので、かなりの語学力と忍耐力が要求されるものであった。研修での成績は、帰国後本学の卒業要件単位として（8～10 単位分）認められるものであった。

この Stephens College での研修では「乗馬」のクラスも用意されており、プログラムに参加した学生たちは得難い体験をすることができた。

追記だが、2002 年に Stephens College からプログラム担当の Whitehill 先生と 10 名余りの学生たちが本学にやってきて交歓会を持つことができたことは外せない。

“Study Abroad Program”に関りを持ち、協定の各大学を引率者として何度か訪れることができたことは、参加した学生たちは言うに及ばず、言葉では表せないほどの素晴らしいものを得たことである。

海外での体験が貴重な人生の肥やしになるとの確信から、松本ゼミは卒業前に全員がアメリカに行っていた（ゼミ旅行）。約 3 年間滞在したボストンに毎年 10 日ほど行っていた。ボストンは歴史の街で、京都とは Sister City の繋がりもあり、市内には“Freedom Trail”が敷かれてあり、そこを辿ることでアメリカ誕生の歴史を直に感じることができた。さらに、Mayflower 号の到着した Plymouth、魔女裁判で有名な Salem、世界経済の中心地ニューヨーク等にも足を延ばし見聞を広めた。そんな中、2002 年春に NY を訪れたときのことは今でも強烈に頭に焼き付いている（前年の 9 月 11 日に世界貿易センタービル 2 棟がテロの標的になったが、その近くの建物の周りには、沢山の犠牲者の写真や“Remember 9-11”と手書きした垂れ幕等が多く貼り付けられていたのである）。その場に立っていると発する言葉もなかった。

三つ目に取り上げたいのは、高校生を対象にした女子大主催での Speech Contest（“Say What You Want”）を開いたことである。「英語の東雲」を売りにしている以上、英語を前面に打ち出した企画を是非持ちたいと思い、この案を実行に移したのである。秋に行われる「東雲祭」の目玉として実施することとした。裏方として支えてくれたのは松本ゼミの学生諸君だった。メインゲストには審査委員長と講演をお願いすることとし、お呼びする方は全国的に著名で誰でもよく知っている人にした。1997 年の第 1 回目は、審査委員長には当時「同時通訳」の第一人者として有名な松本道弘氏をお呼びした。近隣各県の高校に募集をしたところ、24 名の応募者があった。第 1 回の賞品は、優勝者には「研究社の英和・和英大辞典セット」と副賞として「沖縄旅行」（2 泊 3 日、保護者 1 名同伴）が贈られた。第 2 回以降の主なメインゲストは、吉田研作氏（上智大学教授）、村松増美氏（サイマル・インターナショナル顧問）、マーシャ・クラカワー氏（聖心女子大学助教授）、松本和也氏（NHK アナウンサー）等であり、賞品も MD プレーヤー、iPod nano と変わった

が、沖縄旅行だけは継続した。第 6 回目からは「旺文社」が協賛として名を連ね、第 10、11 回大会には素晴らしい優勝トロフィーを寄贈して頂いた。また愛媛新聞社は当初から後援、翌日の紙面で大きく取り上げて頂いたことは本当に感謝に堪えない。

第 11 回をもって Speech Contest は幕を下したが、参加してくれた高校生は延べ 132 名、参観者は約 1400 名を数え、「英語の東雲」の一面は示すことができたと思っている。

英語教育への関り、多くの先生方との出会い、更に、授業やゼミを盛り上げてくれた学生たちとの今も続いている繋がり――「東雲」での“irreplaceable”な「宝物」である。